

下野(しつり)新聞 2006.08.16

声なき声

生命のメッセージ展 in とちぎ 4

二人の遺骨は家にある。「あの子たちについて、こころが生活の場」

父親の井上保孝さん(55)は、祭壇に並んだ奏子(かなこ)ちゃん(当時3)、周子(ちかこ)ちゃん(当時2)の遺影を見つめる。

十歳と八歳のお姉さんになつていたはずの二人に、弟と妹が三人できた。事故の時、母親の郁美さん(33)のおなか

にいた三女典子ちゃんは小学一年生になった。周りは新たな命の誕生を喜んでくれる。「二人の生まれ変わりがね」。でも郁美さんは「そうじゃない」と心の

絶対、加害者にならないで

で繰り返す。「私たちにってば、いつまでたっても二人足りないんです」

保孝さんの左腕と背中にはやけどのあとが広がる。皮膚移植を繰り返した太ももは、白っぽく変色。痛みは今でも

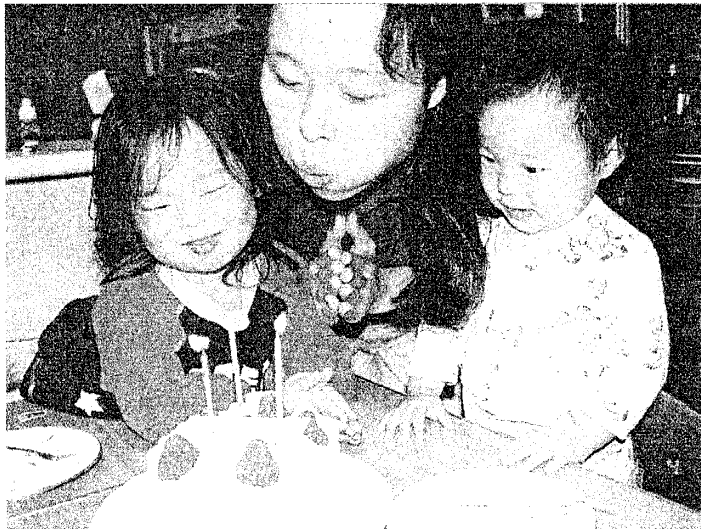
ある。一緒に入浴すると、子どもたちは聞いてくる。「パパ、じこのせいでそうなっちゃったの?」

それでも保孝さんはつらそうにしない。傷あとを隠そうともしない。「奏子と周子が苦しんだことを考えたら...」バックミラーに映った黄色い大型トラックが迫る。「あちゅい」。後部座席から聞こえた最期の声、炎上する車内。あの日の光景は目を閉じるとよみがえる。

事故から六年と八カ月。加

東名高速追突事故

井上 奏子(3歳) 周子(1歳) (千葉市)



奏子ちゃん(左)の3歳の誕生日を家族で祝う。右は周子ちゃん、中央は郁美さん。撮影したのは保孝さん=1999年4月、千葉市の自宅

んは加害者に聞いてみたい。

加害者に下された判決は懲役四年。「今の法律は命の重さ、罪の悪質さを反映していない」。全国から声が上がった。三十七万人を超える署名が集まり、危険運転致死傷罪ができた。その中心に井上さん夫婦がいた。

でも二人は満足しなかった。刑を重くするだけでは飲酒運転をなくせないと思っ

た。署名活動と合わせ、二〇〇一年の春から二人で全国を歩き始めた。小中高校、少年院警察官研修...。事故の記憶をあえて呼び起こし、悲しみや怒りを訴える。

飲酒運転撲滅へ全国行脚

書者の家族は月命日に欠かさず供え物を送ってくる。しかし加害者本人は出所の翌友日に、一度謝罪に来ただけ。「これからどういう気持ちで償っていくつもりですか。

自分が犯した罪の大きさを忘れていませんか...」。郁美さん

事故概要 1999年11月28日午後、東京都内の東名高速道路で、酒酔い運転の大型トラックに追突され、井上郁美さん運転の乗用車が炎上した。後部座席で寝ていた長女奏子ちゃんと二女周子ちゃんが焼死。助手席の保孝さんは重度のやけどを負った。加害者の男は飲酒運転の常習者だった。2001年、2人の命日に危険運転致死傷罪の新設を含む刑法改正案が成立した。

講演回数は百七十回にもなった。毎回、涙があふれ、言葉に詰まる。でも続ける。「命は奪っても、奪われてもならないもの。一人一人が命の大切さを、もう一度考えてほしい。絶対、加害者にならないで」。二人はいつか天国で、こんな声に出合いたいと思っ